「十三歳の時の被爆証言」　　宇木和美

八月九日登校日だったので、母や妹達と一緒に疎開していた島原から長崎市の大浦町へ帰りました。下宿していた同級生の美智子さんも帰っていて一緒に翌朝登校しました。

二時間目の授業が始まってすぐに警戒警報が鳴ったので皆家に帰る事になり美智子さんと私は走って家に帰りました。家に着いて、制服を着替え、お昼ご飯をどっちが準備するかじゃんけんしていた時に原爆が落ちました。

急に窓の外が光で真っ白くなると、同時にものすごい爆風がドーンと家の中に入ってきて窓ガラスが全部木っ端微塵に割れました。家具や欄間をたおし爆風が全てを薙ぎ倒(なぎたお)して通り過ぎました。私はすぐに階段を下りてお店の大きな机の下に隠れ、じっとしていました。しばらくすると外を人がざわざわと歩く足音が聞こえてきたので「あっ、どこかに避難するのだ」と思いました。二階に美智子さんを呼びにいくと美智子さんは耳を押さえてうつ伏せになっていました。彼女の周りには小さなガラスの破片がいっぱい落ちていました。美智子さんは頭から血を流していたので私は泣きながら彼女に声をかけて起こしました。近くの医院に美智子さんを連れて行き、手当てをしてもらいました。医院の前の川に近所のみなさんの姿が見えたので一緒にいました。

翌八月十日、父が熊本の出張から帰ってきて、私と美智子さんを家族の元につれて行く事になりました。翌日道ノ尾駅に行くため三人で爆心地を歩きました。焼け野原で瓦礫(がれき)ばかり、見えるのは周囲の山だけでした。通っている道のそばには亡くなった人や馬の黒焦げの死体がそのままになっていました。私達は線路の上をずっと歩きました。大橋の所で線路のすぐ側に赤ちゃんをしっかり抱いた女の人が黒焦げになって横たわっていました。それを見たとき、かわいそうで、戦争は二度としてはいけないと心の底から思いました。道ノ尾駅舎につくと、やけどやケガした人達がゴザの上に横になっていました。負傷者は重傷の人から、次から次に大村や諫早の病院へ汽車で運ばれて行きました。私達は駅舎に入れなくて駅の前の砂利道に座っていました。夕方になると道ノ尾の近所の農家の人達か、おにぎりやお茶を持って来て下さいました。

八月十一日の汽車に乗ることができ、美智子さんを家族の元に届けて、私達は島原鉄道に乗り疎開先へ向いました。山田村駅※でおり、畑の中を家に向って歩いていると、家の前に立っていた母が駆け寄り私をしっかり抱きしめてくれました。

母は汽車が着くたび家の前に立って駅をずっと見ていたそうです。

※山田村駅（現島原鉄道　吾妻駅）